



本多日生上人名著在庫品特價提供

- 一 聖語 錄 改版 特價 金壹圓八拾錢
- 一 日蓮主義本領 送料共 金貳圓拾錢
- 一 法華經要義 賜天 全 金貳圓五拾錢
- 一 日蓮主義心髓 全 金壹圓五拾錢
- 一 日蓮主義精要 全 金貳圓九拾錢
- 一 佛教の本質と其價值 全 金貳拾五錢
- 一 法華經要品 全 金五拾錢

磯部滿事謹輯

- 一本多日生上人 特價 金壹圓七拾錢
- 一 勤行作法 送料共 金拾錢

以上施本用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

東京市小石川區音羽町六ノ一七

財團法人 統一團出版部

振替東京〇二四九〇番

一月「教」誌

定價一冊 金拾五厘
送一年前金料 金壹圓貳拾錢
送料共 金壹圓貳拾錢

東京市小石川區音羽町六ノ一七
「教」發行所
振替東京一〇九四〇番

目次

本佛の感應……………	日生上人
日蓮教學講座(第三回)……………	河合 陟
日什上人諷誦章講話(其六)……………	梶木 顯
所感……………	齋藤 實
思親閣への道……………	貝塚 生
記事……………	

○本部團報並に各地教信

○寄附團費誌料領收

第三十八年十二月號

統一團定價
一冊 金貳拾錢 送料五厘
半々年 金壹圓貳拾錢
一々年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御
通知ノ事

昭和八年十月廿四日印刷納本
昭和八年十一月一日發行

(第四百六十四號)

不許複製

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼 磯部 滿事
發行人 磯部 滿事
印刷人 鈴木 日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都印刷所
電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ交々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見シ 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超ニ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系のニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ振興ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開演シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ每年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ每年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ每年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

本佛の感應

(上篇)

日生上人

本日は「本佛の感應」といふことをお話しやうと思ひます。法華經に基いたる「信仰」はごういふ意味であるかと云へば、これからお話しするところのこの「本佛の感應」といふことが信仰の中心にならねばならぬのである。ところが多くの法華信者は「南無妙法蓮華經」といふ言葉のために、その信仰が頗る不透明な有様になつたのである。日蓮聖人が「南無妙法蓮華經」といふ唱へ言葉を以て宗旨をお聞きになつたことは、頗る善いことではありますけれども、その意味がぼんやりしたことになつたのは、これは非常に遺憾なことであるのであります。いまでも佛教を代表する言葉は「南無阿彌陀佛」と「南無妙法蓮華經」といふ唱へ言葉が一番廣く行はれて居るやうでありますが、「南無妙法蓮華經」の聲は盛に唱へられて居るけれども、それがどういふ信仰意識であるか、信心の心持、信仰の内容といふものを吟味すると、頗る漠然として居るのである。これが法華信者の缺點である。信者ばかりではない、坊さんの頭もやはり漠然として來て居る。「南無妙法蓮華經」といふのはどういふことぢや」「それはどうもチョツト難かしいのです」といつて、たゞむづかしいといふことであを少しも答辯をヨウしないのである。

さうして「南無妙法蓮華經」の中にはなんでもあるのだといふやうなことを言つて居るからして、「南無妙法蓮華經」と唱へながらその信仰意識が分裂をして来て、なにか或る人格のものを求めて、鬼子母神さまを信心するとか、帝釋さまを信心するとかいふやうなものを求めて、そこに信心を止めて居るのであるが、さういふことは非常な間違つたことである。

「南無妙法蓮華經」といふ唱へ言葉は、本佛と吾等との感應の間に起るところの仲介の言葉である。仲介といふのは恰度婚禮の仲人みたやうな意味で、宗教には客體の本尊となるものと、主體の信仰をするところの自分と、即ち佛と吾等といふ關係の間にこれを繋ぐものが即ち仲介者である。その仲介者として「南無妙法蓮華經」といふものは顯れたのである。佛さまの方から言へば「南無妙法蓮華經」を救ひの綱として下げられたのである。吾等は信仰を言表す言葉として、その「南無妙法蓮華經」の綱に絶つて居るのである。それは「壽量品」の譬へに依つて見れば、佛を良き醫者に譬へ、吾等を病める子供に譬へ、さうしてこの「南無妙法蓮華經」が良き藥に譬へられて居る。お醫者さまと病める子供とあつて、その間の藥として「南無妙法蓮華經」といふものがある、その藥はお醫者さまたる本佛より與へられたるものである。又日蓮聖人の「法蓮鈔」といふ御書に依れば、母親と赤子とさうして乳といふ關係に説かれて居る。この乳が即ち仲介者たるころの「南無妙法蓮華經」であるのである。さういふ風にいろ／＼澤山に譬へはあるが、その意味は變らない。それ故にこれを信仰の意識に移して言へば、本佛

を「感應主」と云つて御利益を下されるところの相手方として、さうしてそこから流れて來るところの大慈悲の救ひを受けるといふのが、これが法華經の信仰である。

殊に日蓮聖人の御遺文の中では「松野女房御書」にはそのことを最も克くお示しになつて居る。

心なき女人の身には佛住み給はず、法華經を持つ女人は澄める水の如し、釋迦佛の月宿らせ給ふ、譬へば女人の懐み始めたるには、吾身には覺えねども月漸く重なり日も屢過れば、初めにはさかど疑ひ、後には一定と思ふ、心ある女人は男子、女をも知る也。法華經の法門も亦かくの如し、南無妙法蓮華經と心に信じぬれば、心を宿として釋迦佛懷まれ給ふ、始めはしらねども漸く月重さなれば心の佛夢に見え、悦ばしき心漸く出來し候べし、法門多しといへども止め候。(一七七九)

即ち「南無妙法蓮華經」と唱へ初めたときは、まだいつかうお釋迦さまの有難さがわからぬけれどもだん／＼唱へて信心が徹底するといふと唱へる毎に釋迦如來がそこにお現れになつて、さうして自分の精神の内部と釋尊との所謂「交渉」と言つて、手を引合つた關係が瞭りわかつて來る。「南無妙法蓮華經」といふことは、釋迦如來と吾等との間を離さぬやうに繋ぐ力であるからして、「南無妙法蓮華經」と唱へたときには、「ア、有難い」と思へば、すぐそこに佛さまを描き出して、その佛を渴仰する精神が燃えて來る。それがしまひには向ふにござるのでなくして、もう自分の精神のうちに佛と一つになるやうな気分になるのが、それが信心の進んだ人といふのである。恰度婦人が懷妊をするときのやうなもので、初

めは懐妊したといふことが克くわからぬけれども、月日が経つに従つて瞭りと、「これは妊娠をしたのだな」といふことがわかるやうになり、さうしてしまひにはそれがお腹の中で動いて来て、「ア、生きて居る子供だな」といふことを確實に意識するが如くに、しまひには釋迦如來を確實にわがものとして意識することに於て、初て法華の信心が進んだといふことが言へることになつて居るのである。さういふ意味がいまの法華宗のザラッペシの坊さんや信者にはわからなくなつて居るだらう、いくらお題目を唱へて居つてもお釋迦さまは一生涯出て來ない、しまひには鬼子母神さまの鬼のやうな顔が出て來たり、帝釋さまの猿みたやうなものが出て來たりするやうになつて居るといふのは、それは非常な間違である。宗教の大事な話は澤山あるが、一ばん大事なのは自分の信仰を捧げる相手方が一ばん完全なものでなければならぬ。宗教の信念といふものは、宇宙の絶対の唯一のものに向つて居らなければならぬのである。これより以上のものは無いといふことでなければならぬ。ところが帝釋さまや鬼子母神さまなどいふものは、まだ／＼の上がいくらでもある、ごく粗末なものである。佛法では「六道流轉」といふことを言ふのである、六道の辻に迷ふて居るといふ、帝釋や鬼子母神はその六道より以下である。六道といふのは十界の中の「地獄」「餓鬼」「畜生」「脩羅」「人間」「天上」の六つを言ふので、天上界までが六道の迷ひの裡に居るのである。その天上界に屬するところに帝釋天といふものもあるのである。鬼子母神などは或は天に屬し或は餓鬼に屬すると云つて、人の子を取つて喰つたりするやうな鬼婆であ

るから、さういふものを一ばん有難いやうに思ふといふやうなことはみなこれ迷信といふものである。宗教の話で一ばん大事なのは、信念とは唯一絶対なりといふことである。それはもう信仰といふことの定義である。恰度女で言ふたならば亭主は一人でその亭主を一ばん大事なものとして可愛がるといふことが、嫁に行くときの一ばん大事なことであると同じことである。それがそのとき／＼に依つていろいろに變りますといふやうなことであつては、嫁に行くといふことは出來まい。宗教の信念といふものは純一であり、さうしてそれは絶対である、斯ういふことはもう宗教の信念の性質上に於て第一條件である、それから教へて行かなければならぬ。自分の夫でも實はさういふ譯なんである、もう男のうちの一人ばん飛切り上等の唯一絶対の者を掴まへるといふのがほんどうの理想であるけれども、さうもゆかぬから大抵の人はいゝ加減のところ合して居るのであるが、宗教の方は別にそこは遠慮はいらぬ。人間の方は一人と一人との配合であるから、飛切りのものはどうしても一人の人が取つてしまふものだから、そのほかの者はマアいゝ加減なところで我慢しなければならぬ。ところが宗教はいくら大勢の者が一人の佛を信じても差支がないのである。であるからもうこの宇宙に於ける唯一絶対といふことを理想すべきものであるといふことを第一に考へなければならぬ。

これは世界に通じての宗教の共通の大原則である、信仰問題の第一條件であつて、なんといつてもそれに就て先づ考へをさめてゆかなければならぬ。それがそのとき／＼の都合でいろいろ變つて、少しの

條件を以て違つたものを信心する、例へば私は眼が悪いから眼だけ治して下さいといふて信心することになれば、眼の悪くない者はそんな神様は要らないといふことになる。例へばお薬師さまが眼を治す佛さまだといふやうなことがなれば、生れつき眼の達者なものはお薬師さまなどはチツトモ関係がないといふことになる。又眼を患ふて居つた人も、それが治つたならばもう関係がないといふことになつてしまふ。目ぐすりが發達すればお薬師さまといふものは要らなくなるといふやうなわけである。そんなことは野蠻の時代に、目ぐすりもなく醫學も進歩しない時分に、眼病のお薬師さまとかいふやうなことが行はれたので、つまらない迷信である。或は瘡守とかいふてこの邊にそんな稻荷さまがあるでせう、瘡をかいた者はそこへ行けば治るといふ、そんなことはみなつまらぬ迷信であつて、瘡などはそんな神様にお参りをして決して治るものではない、今日は醫學が進歩したのであるから、醫療にかけさへしたならばさういふ病氣は直き治るのである。さういふやうな宗教は野蠻草昧の、お醫者もなにも無いアイヌ人みたやうな中に起つた遺物であるから、そんなものをこの進化してゆく日本人がいつまでも有難がつて瘡守のお稻荷さまとか眼病のお薬師さまとか言つて居つてはいかぬのである。

どこまでも宗教は世界に對比して、日本人の信する宗教は一ばん善いといふことを標榜してゆかなければならぬ。日本人の信する宗教は凡ゆる宗教の中に於て一ばん善いといふ風に、世界的な文化の競争のうちに於て一ばん善い宗教を取るといふことを日本人は理想して掛らなければいかぬのである。たゞ先祖がやつて居つたからといふやうなことを以て、いつまでもやつて居つてはいかぬ、それは先祖は随分眼病のお薬師さまや、瘡守のお稻荷さまを拜んだ者が澤山あるけれども、さういふ幼稚なことは先祖のやつたことでも改めた方が宜いのである。學問知識の進まぬ時代の先祖のやつたことは、それはなにも宗教のことばかりではない、なんに付ても改めなければならぬことが澤山あるのである。第一病氣に關するところの宗教の迷信などは、今日まで多大な害毒を社會に流して居るものである。或は縁談に關するところの迷信といふやうなことも宗教に附着して起つて、甚だ善くない害を社會に與へて居る、それはもう婦人のひとが魁となつて改めなければならぬことであると思ふ。

そこでその宗教の相手かたといふものは唯一絶対でなければならぬといふことから考へたとき、法華經に現れたるこの本佛と申すものが、どの方面から考へても最も完全を意味して居るのである。一ばん大事な點は、斯ういふ宗教の絶対を考へるときに於ては、哲學上からの非難といふものが一ばん恐いのである。人間の智慧の眼を開いた方からして、「そんなものがあるといつてもそれは想像ぢやないか、どうしてそれがあるといふことが證據立てられるか、その實在の根據を示して呉れ」……これで大抵の宗教はみな吹飛ばされてしまふのである。そんな稻荷さまの帝釋さまの鬼子母神さまのといふやうなものでは、少しもこの實在といふことの意義を論證することは出来ないものである。哲學上に於て言ふ實在といふことは、始めなく終りなく、さうしてそれが非常な尊い値打のものであるといふことにな

ければならない、たゞそこにあるといふだけではそれは一時の現れで、夢か幻かといふことになるので大した値打はない。即ち時間に於て言へば時の始のそのまた始を貫いて、さうして終りの終りに至つて滅びないところのものである、これを實在性と云ふのである。お稻荷さまの狐なんといふものは、生れたり死んだりするものであつて決して實在のものではない、お狐さまが長生をするといつても、百億萬年も生きる狐といふものはない、そんなものは決してあるものではない。長生をして居るといつても五百年か千年の狐ぐらゐるが最上等である、九尾の狐といつてみたところが千年ぐらゐるもので、千五百年もすれば尻つぼの毛もみな脱けてしまふやうなものであるから、左様なものを以て實在といふことは言へない。狐や狸なんといふものは無論問題にならぬが、阿彌陀さまでもほんとうは實在といふことが言へないのである。阿彌陀さまは「十劫正覺」といふて、古いやうであるけれども「十劫」といふ始がある、その十劫の前は「法藏比丘」といふ坊さんであつて、迷ふて居つたものであるといふことになるから、頭が切れてしまふ。始あるものは終ありといつて、物事は總て始を立てたならば一方に必ず終りといふものが出て来るのである。一方の端があれば必ず他の方の端といふものがあるのである、一方が無限でなければ他方も無限といふことにはならない、かういふことは哲學の知識から言へばすぐわかることであつて、始を立つれば終ありといふことになる。いくら長い糸にしても、こつちに端があつたら必ず一方に端といふものがある、一方の端がどうしてもないといふことになるから、他方も端がない、

即ち始なく終なしといふことが言得られるのである。であるから途中から出来て来たやうなものは太郎稻荷がどうちやとか、穴守稻荷がどうちやとかいつても、そんな途中から出て来るものは宗教では信仰の對象とする値打がないのである。どうしても始なく存在するといふことでなければならぬ。人間そのものも、始があり終があるといふことならば宗教には決して来ないものである、吾々の魂も途中からファイと出来て来て、さうして途中で消えてゆくシャボン玉みたやうなものならば、なにも宗教などに來なくても、いゝ加減そこらで間に合せなことをやつて居れば、そのうちにバツと消えて行つてしまふけれどもこの吾々の魂といふものは無限の後までも消えないところの尊さを持つものであるといふことを考へることに於て、初て宗教といふ立場に這入つて来るのである。自分自身さへもさういふわけ人間が生れる前のことを考へれば、前の生、その前の生といふやうにだん／＼傳ふてゆくならば、即ち始なき以前より吾々の生命といふものは存在して居るもので、その間にいくら死んでも生れてもそれは一時の生死であつて、永遠の存在は常住不滅の我が本體といふものがある。今日只今のこの心、これは無限の始、無限の終に續いて居るものである、そこで非常に尊いといふことがわかつて来る。であるからこの肉體は叩き殺されやうがどうならうが、この我が心といふものは、焼くことも斬ることも出来るものではない、肉體は斬ることが出来るけれども、自分の精神魂といふものをどうすることも出来ない無限の存在を持つて居るといふことを信することが出来るのである。

さうしてこの自分の心といふものはなんに依つて支配されてゆくかと言へば、たゞ勝手にゆくやうなものであるけれどもさうではない、それは「業の力」といふものに依つて支配されてゆくのである。所謂因果應報の理りに依つて、自分の爲したることの善惡に依つて、悪いことをすればその悪い惡業といふものがこの自分の魂を引張つて悪い方へ連れて行くことになるのである、鬼が自分を地獄に引張りに来るのでもなんでもない、巡査が泥棒を捕へに来るのでも、なにも巡査が意地悪く捕まへに来るのではない。自分が巡査に捕まへられなければならぬやうな泥棒といふ罪惡を犯して居るから、その罪惡が即ち自分を監獄へ送るのである。それを送るべきか否かといふことは裁判官が調べるけれども、罪があれば監獄へ送るべきものぢやないかといふことになつて送られるのであるから、やはり自分の爲したことが自分を引張つて行くのである。だからこの自分自身の魂が善いことをして善い方へ上つていかうと考へ或は悪いことをして悪い方へ下つていかうと考へる。併ながらどちらにしてもその自分の魂は滅びないものであるといふことに於て、初て宗教の關係を生するのであるから、無論佛さまといふものに付ては始なく終なく絶対の實在者であるといふことを考へなければならぬ、それ一つでも宜いのである。その一つのものさしから考へてみても、大抵のつまらぬ宗教のやうなものはみな吹飛んでしまふ。そこらに祀つてあるやうなものは、みな始なく終なき實在であるといふわけにはいかぬでせう。觀音様でもやはり駄目である。「觀世音菩薩」といふのは始もあり終もあり、まだ〳〵佛さまにもなつてゐないものである。左様なものを擧げたならば、殆ど今日世の中に行はれて居る所謂宗教の對象となつて居るやうなものは數限りもなく澤山あるけれども、それ等を超越して、眞に始もなく終もなく常住の絶対の覺りを持つてござる佛さまといふのはお釋迦さま一人であつて、そのお釋迦さまが法華經の壽量品に於てさういふ意味だといふことを明かに吾等にお示し下さつたのである。

であるから西洋の哲學が發達をして、さういふ論證方法が進んで來ても、それにほんとうに合格するものは佛敎では壽量品の本佛より外にはないのである。あとのものはこの哲學的知識からはみなやられてしまふものである。それは時間の方に於て始なく終なくいふことを申したのであるが、更に空間と言ふて、今度は横の廣がりの方からもやはりその通りに行かなければならぬ。即ちその廣がりの方に於ては、東西南北上下左右どこにでも働くものでなければならぬものは言へないのである。西の方に障取つたり東の方に障取つたり、例へば西の方の「安養世界」といふ世界に控へ込んで、そこに阿彌陀さまが居るとか、薬師さまは東の方の「淨瑠璃世界」に障取つたとか、そんな交番の巡査の受持みたやうに居るところをさめられて、そこにじつとして居るといふやうなものは、ほんとうの佛さまではない。全宇宙の到る處に千變萬化大活躍を起すといふことこそ、ほんとうの絶対といふものである。吾々の魂でも實はそれだけの値打を持つのであるが、いまはこの人間といふ世界のうちに入れられて、もうこれだけが自分のものだと思つて、かういふ小さな借家の中に押込められて居るから、そこでこれを

「凡夫」といふのである。「一心法界に遍し」と云つて、もう自分の心が全宇宙と同じ自在の活動に就くとき、初てこれが佛さまといふことが言へる。その非常な尊いものを實は同じやうに誰もみな持つて居るのである、その尊いものが何等の拘束を受けずして全能力を發揮したるとき、これを佛といふのである。

基督教に於てはやはり始なく終なくといふことは言ふたけれども、この働きをたゞ一つのものにしてしまつて、天に在す一人の神が全智全能であるといふことを言ふのである。併し佛教の方では、全智全能であるところの佛がいくらでも「應現」と云つて身を分けて現れて來るといふことを示して居る。そこが基督教と佛教と違ふところである。恰も天の月は一つであるけれども、水に映る月は千萬無量の影を宿すが如くに、一月萬映の關係を以て佛教といふものは説明されて居る。基督教のは恰度大きな蠟燭みたやうなものであつて、たゞ一つだ、それが光つて居るといふ。佛教のは電氣燈のやうなものであつて、その本源に歸れば發電力は一つであるけれども、電球を欲めさへすればいくらでも光を殖やすことが出来るやうなものである。併しいくら澤山點いて居る電燈でも、これを源に戻せば一つの力である、この發電所と電燈とを一つに考へて居るのが佛教である。その間は決して切れぬものではない、みな電線を傳ふて無数の光となつて居るので源は一つの力である。發電所の電力と電球の光とは一つであるといふところを佛教は見たものである。

併ながら吾々の意識は、さういふ立派なことを一時考へてもすぐにそれがわからぬやうなことになるからして、そこでさういふいろ／＼の意味を籠めて、完全圓滿といつてモウ時は始なく終なく、所は邊りなく際りなく、普遍無限に働いてお在でなさる絶対無上の尊い方ちやとして、そこで簡單に「本佛」と申すのであります。であるからそのことを一べん考へて置けば宜いのである、一べんそれを考へてチャンと自分の頭をさめて置きさへすれば、そのたび毎に一々電燈を發電所の關係といふやうなことを考へなくとも、もう「本佛」といふ一つの言葉でそれ等の意味合をすつかり籠めてバツと考へればそれで宜いのである。

けれども一べんもその連絡といふものを考へないやうな人は、法華經を信することは出来ない。そのときになつて鬼子母神さまと帝釋さまと、それはみな別々の神様だといふやうなそんな切れ／＼の頭では、法華經を信じて居る人といふことは言へない、もう少し思想が伸びなければ駄目である。いまの電氣のことで考へたらすぐわかりさうなものである、電氣なら電氣はこれが十六燭光であるとか、これは五十燭光であるとか、瓦斯入であるとかいつたところが、たゞ電球を取替へさへすればどこにでも光るといふことはすぐわかるでせう。それを阿彌陀さまは五十燭光だらうか、お薬師さまは十六燭光だらうかと云つてそんなことをいつて心配する必要はない、たゞその電線が切れないやうに、さうして電球が壊れないやうにさへして置けば、どこに持つて行つてもちやんと光るのであるといふことを考へた方

が宜いのである。

法華行者はさういふ意味に佛さまといふものを考へたのであるから、そこで一ばん氣が廣いことになるのである、そのほかのものは五十燭光の電球一つを掴んで「ア、これは明るい」と云つて騒いで居るやうなものである、「五十燭光が明るい」と云つても百燭光に替へてごらんさい、もつと明るいでせう」といふことを考へて居る者が法華信者である。隣りの電球と自分の家の電球と喧嘩をさせて廻ることが法華信者のやうになつたのは、それは眞の教義といふものに暗いからそんな愚なことが起つて來るのであつて、法華經の教は決してそんなものではない。(次續)



日蓮教學講座 (第三回)

文學士 河合 陟 明

- ★ 汝等當に知るべし、我いと量り無き昔よりこのかた既に大いなる覺に入り、永く
- ★ 諸の迷を斷てり、金剛の如正法の寶藏は常に樂しくまことの我にしてまた淨
- ★ けし。我今此に譏り難き業を顯はし方便の力もて大涅槃に入るは、世法にならひ
- ★ 示して衆生をして、身は電の如くなるを知つて我を戀ひ慕ふの心を生せしめん
- ★ となり。(大涅槃經)

第一章 佛陀の人格的諸相

第一節 佛陀の恩德 (續)

大覺世尊の心花まさしく開きて徳香四方に薫り布き、色も相も法界に徧く充ち渡れるが如く、一切種智の光明と恩澤無外の大慈悲は諸の衆生の上に及

びて微妙の信慧の歡喜を生ぜしめ、又如來心中の潜龍は今し第一義天に昇騰して神通の大力用自在解脱の神徳を發し、徧く法の雲を起し廣く法の雨を雨し衆生等しく法の潤ひを受けたるが如く、我が釋迦牟尼世尊が一度び伽耶城に覺を開き給ひてより、起つ

て鹿園に初めて法輪を轉じ阿若憍陳如等五仙を始め
舍利弗、目連等の大弟子乃至千二百五十人の諸弟子
を得給ひつゝ、北進して故國に歸り父王と其の一族
を無上の正信に教化せられ、先づ報恩の道を行じて
出家當初の誓願を第一に恩縁の眷族に果し、或は頻
毗沙羅王を化導しては王舍城の東北靈鷲山を開き、
或は舍衛城に波斯匿王と勝鬘夫人を教化し、給孤獨
長者の歸依を受けては祇園精舎を開き、或は又養母
摩訶波闍波提、妻耶輸陀羅等を始として女子教團の
成立と爲り、更に切利天宮に昇りては慈母摩耶夫人
を化益し給ひ、又降つて指鬘外道を感化し、阿闍世
王を廻心せしめ、提婆醉象の調伏、摩登伽女の教化
月上女の歸依等、上は大智舍利弗より下は愚者周
利槃特に至るまで世尊大徳の人格的感化教益は誠に
深く廣く大いにして、更に又布薩説戒會の創設、夏
時安居、會議法の設定等、世尊の前後五十年に亘る
御化導は實に多岐多般におはしませすのであつた。而

て世尊は在世多く王舍城の靈鷲山に止住し説法し給
ひ、此の處を根據として屢々十方に向つて遊化を試
み給ふたのであつた。而て今や説くべきは説き、度
すべきは度し了りて、世尊出現の大事茲に成辨し、
世壽八十如月十五望月の夜半、跋提河畔、娑羅雙樹
の林に、更に縷々切々の慈訓を垂れ給ひつゝ、安詳と
して涅槃の雲に隠れ給ふたのであつた。あゝ諸弟子
の感懐は如何計りであつたらう、諸の信徒の心中は
如何計りであつたらう、私は佛典を拜して世尊の入
涅槃のほとりに至る毎に或る測り知らぬ深き一
脈々たる無限のものに打たれ、身は時を超えて世尊
の當時に直接し、まのあたり世尊に面奉し拜顔し、
たとしへなく世尊を慕ひ懐かしみ、此の世ならぬ我
が身をすらそらるに深く感ずるに至るのである。そ
も私達人界の身に是れ程まで痛切なる感を抱かし
めらるゝものが又とあるであらうか、あゝ慈父大覺
世尊……我が慈父本師大覺世尊……

み佛が入涅槃に垂んとして遺し給ひし「遺教經」
には其の最初に、

釋迦牟尼佛初めに法輪を轉じて阿若憍陳如を度し
最後の説法に須跋陀羅を度し、度すべき所の者は皆
已に度し訖りて、娑羅雙樹の間に於て將に涅槃に入
らんとしたまふ。是の時中夜寂然として聲無し、
と、あゝ大聖世尊の般涅槃の何といふ静かな又何
といふ大きな光景におはせし事であつたらう、此の
最初の一聯の文は、僅かの文字ながら、世尊八十年
の御生涯、聖者の一生を一望の中に收め、五十年化
導の幾多の御辛勞を経て、今しも大圓寂の境に入り
給ふ世尊の尊容をさながらに寫し奉つて居る事を覺
ゆるのである……

大般涅槃經に云く、
爾の時に世尊八種の聲を出して普く大家に告げた
まはく、汝等大いに號哭して嬰兒の如くなること莫
れ、各々相誡めて自ら心を亂る勿れ、汝等は此の行

苦生死の大海に於て、淨心を勤め修して念慧を失ふ
こと勿れ、疾く正智を求めて速に諸の迷を出でよ
三界に身を受くれば苦輪無際なり、無明の郎主、恩
愛の魔王は、身心を役使し策つて僮僕と爲し、徧く
境界を縁じて生死の業を造らしむ、貪、恚、狂、癡
は念々に傷害して、無量劫よりこのかた常に苦惱を
受く、何ぞ智有らん者斯の原に反らざる。生死の暴
河は漂流速疾なり。諸行輪轉の法まさには是の如くな
るべし。如來の涅槃は甚深甚深にして不可思議なり
乃ち是れ諸佛菩薩の境界にして諸の少智の者の知
る所に非ず、(憍陳如品の餘)

如來は大智炬を以て邪見の幢を燒くこと乾ける
草葉を大火焰に投するが如し。我れ涅槃の後、汝當
に精勤して善教誡を以て、我が諸の眷屬に妙法を
授與して深心に誨し誘ふべし。戲論し放逸散心にし
て諸の境界に入つて邪法を行すること勿れ。未だ
三界世間の痛苦を脱せざる者は早く出離を求めよ、

此の五濁愛欲の中に於てはまさか憂へ畏れ無救護の
想を生ずべし、一たび人身を失へば追ひ復すべきこ
と難し、此の一形を畢るまで常に須く警察すべし
無常の大鬼の情求は脱れ難し、(されば能く死に對す
る安心覺悟を養ふべし)衆生を憐愍して相殺害する
莫れ、乃至蠢動する生類にもまさか慈悲を施すべし
善惡の報は影の形に隨ふが如し、三世の因果循環し
て失せず、此の生空しく過さば後悔追ふこと無し、
涅槃の時に至りぬ、示教是の如し。

あゝ世尊いまはのきはの慈訓垂誡の如何に哀々切
々たる事であらうか、あゝ尊きみ教、有り難きみ諭
世尊大慈の御魂大悲の息吹き我が靈奥に直射さるゝ
を覺ゆるのである……
佛また諸の大衆に告げたまはく、若し疑ふ所あら
ば當に速に發問して究竟の問と爲すべし。
爾の時に四衆涙を掩ひ寂然として問を發する者無
し、何を以ての故に、一切の四衆は已に戒、歸依三

寶、四諦の理に於て、通達曉了して疑有ること
無きが故なり。
爾の時に世尊師子の座に於て眞金の御手を以て、
身に著くる所の僧伽梨衣を却け、紫磨黄金の師子の
胸臆を顯出し、普く大衆に示して告げて言はく、汝
等一切の天人大衆は、應當に深心に我が紫磨黄金の
色身を看るべしと、爾の時に四衆一切、大覺世尊の
眞金の色身を瞻仰して目暫くも捨てず、悉く皆快
樂せり。(遺教品)

この時靈感大衆の胸に下りて悲愁は頓に去つて悉
く皆快樂を感ぜしといふ、あゝ私も此の時世尊の御
前に侍り世尊の金色の色身を拜し奉りしならんこ
は……如何計りなる靈感をかおのゝきに打ち震へつ
ゝ感せし事であつたらう……あゝ世尊切々の大慈悲
積功累徳の力我等をして身心悦懽の利益に潤はしめ
給ふ、慈父に別れ奉るの悲みと慈父より與へらる
ゝ喜びと、諸弟子、諸菩薩の胸底には感慨交々去來

した事であつたらう、私も亦かくて今はもはや此の
世ならぬものとなつて、世尊の御前に永への世に俱
に在るを覺ゆるのである……

爾の時に世尊娑羅林の下に寶牀に寢臥し、其の中
夜に於て第四禪に入りたまふ、寂然として聲無し、
是の時頃に於て便ち般涅槃したまふ。大覺世尊涅槃
に入りたまひ已つて、其の娑羅林東西二雙合して一
樹と爲り、南北二雙合して一樹と爲る、寶牀に垂覆
して如來を蓋ふ、其の樹即時に慘然として變じて白
きこと猶ほ白鶴の如し、(應盡還源品)

世尊は今や娑羅雙樹の下寶牀に安臥し、初禪より
二禪三禪と寂靜の定中に入り遂に第四禪定に入り
給ふ、苦受樂受を離れ、非苦非樂受を離れ、超然と
して大安樂に住し給ふに至る。この時この世界も寂
然として聲無く一物の動搖する無し、この靜寂の
境に於て便ち大涅槃し給ひぬ、青蓮の御眼閉ぢて永
く慈悲の微笑を止め、丹華の御唇黙して終に再び

梵音を聞き奉るに由無し、あゝ世尊涅槃し給ひぬ、
あゝ世尊此の世を去り給ひぬ、何を以てか再び世尊
に見え奉る事を得べしとやせん。
如來は慈母として衆生を育て
普く衆生に大悲の乳を飲ましたまふ
何期ぞ一旦忽ち捨離したまへる
人天は孤露にして依る所無し
奈何ぞ衆生の罪を救ひたまふこと無けん
願はくは舍利に依つて解脱を得ん
如來の大悲力を懇請したてまつる
世尊よ 願はくは救護して我をして苦地を脱せし
めたまへ (大般涅槃經 應盡還源品)

衆は我が滅度を見て廣く舍利を供養し、咸く皆戀
慕を懷いて渴仰の心を生ず、衆生既に信伏し質直に
して意柔順に一心に佛を見たてまつらんと欲して
自ら生命を惜まず、時に我及び衆僧俱に靈鷲山に出
づ、我時に衆生に語る、常に此に在つて滅せず……

(妙法蓮華經 如來壽量品)

かの月卿雲客に勝れたる雲山淨土の行き易きにも未だ行かず、我則是父の柔鞭の御姿見奉るべきをも未だ見奉らず、是れ誠に杖をくだ(腐)し胸を焦す歎きならざらんや、暮れ行く空の雲の色有明方の月の光までも心を催す思なり(日蓮聖人 持妙法華問答抄)

幸ひなる哉一生の中に無始の謗法を消滅せむことよ、喜ばしい哉未だ見聞せざる教主釋尊に侍へ奉らむ事よ、(顯佛未來記)

臭き頭を法華經に捧げて金色の如來と成るは砂を以て黄金に替へ糞を米に質へるが如し(種々御振舞御書)

大覺尊が大圓寂の涅槃の境に入らんとし給ふに臨み、自ら御衣を開いて紫磨金色の御身を顯し、此の世再び見る事はあらず最後の瞻仰を促して永への告別を一會の大家に爲し給ふたのであつたが、今其

の御身を——不滅の御身を——我が肉眼よりは隠れ給ひし如來紫金法身の實在の御身を、まのあたり再び拜し奉る術こそ、否しかのみならず我身も亦實に是の金色の佛身を成する如是大果報を獲得する術こそ、誠に世尊金口の御教のまゝなる法華妙行捨身決定の不退轉修行の曉にこそはあるのであらう。日蓮聖人一期の行化と本佛感應の妙教とは、此に至つて彌々我等に痛烈至純の活感化を及ぼし來るを感ぜずんば非るのである。あゝ世に出でませし生身の御佛は今尙我等が頭上を照し給ふてゐる……

偉いなる哉佛の御光り、勇ましき哉上無き丈夫、迷へる人を恵さんと此世にこそは現れ給へ。慈悲の眼をもて此世を觀れば、人々惡道に苦しめり、み佛除きては能く救ふ者無し。み佛此世に在まらずば、人に眞の樂み無からん、み佛此世に出でまして、朽ちぬ樂み我等に恵まれぬ。

み佛を見奉らば大いなる功徳を得ん、佛の御名を歎ぶ人は此世の寶と敬はれん。

み佛の極み無の御力に依り、退くこと無き位得て慈みの光世を照らし、諸人の歸依する所とはならん、み佛毎に護り給へば其の功徳に量り無し。

佛の境を常に積ふれば、み佛は甘露の智慧を灌ぎ給ひ、其の信金剛の如くにて、佛にむかひて恩知る。すべての方便をなへて世の諸の人を救ふ。是

ごまこと佛の子よ。

心涼しく貪の濁を除き、大いなる慈悲もて礙り無く總ての人を念ふ、人々に無畏の徳を施し、實の如く行へば、功徳は實に佛に等し。

菩薩信力安らかに智慧の力は調ひて、心正しく清らかなれば、定めて眞を解るなり。

末の世盡して饒まん爲に、或は地獄の苦をすらも受け、慈悲の爲には世に隨ひ、量り無き正法の教説く。

身は法界に遍くして、人の心に隨ひつ、「我」と「彼」との分別離れ、淨きも染れしも取る所無く縛はれも解くるも分ち無く、たゞ人々と樂みを共にせんとは願ふなり、すべて世の人力を想へり、智慧もて入れば畏れ無し。

虚空の尙量らるべきも、菩提の心は知り難し、そは大いなる慈悲限り無くして十方の世に滿てばなり。

よろずの國の御佛は、菩提の心を發すを讃め給ふ量り無の功徳を莊嚴とし、清けき彼岸に到りなばその性もろくの佛に異らず。

よろず世の御佛と、人々の受くるあらゆる樂みは是れ皆菩提の心より生まる、此の心佛の御國を嚴り、此の心人々にこよなき幸をば與ふなり。

量り無の時の間も、此の法まことに遇ひ難し、若しや聞くこと有るならば、そは御佛の御願に依るみ佛の自在なる御力を聞き、一心に信じまつらが

ん人々々は竟に上無き覺得て、妙の法をば世に説か
ん。

世尊の出現といふ大なる事實よりして、我々は
佛陀に四種の誕生を説く事ができるであらう。第一
には佛陀の肉身の降誕である。四月八日無憂樹蔭の
ルムビニの園に、淨飯王摩耶夫人の愛子として人の
世に生れ出で給ひし事である。此時梵天帝釋は白鬚
を以て太子を受け、雙龍は華香を混ぜる温涼の水を
湛へて灌頂し奉るや、太子は四方に七歩を歩み「天
上天下唯我獨尊 三界皆苦我當度之」と高ら
かに唱へ給ふた。太子は悉達多即ち一切義成就と名
づけられ、いはゆる「生れながらにして未だ獲すと
雖も其理必ず臻る、靈瑞感通して嘉名早く立てるも
の」生れる時よりして既に三界の師主、衆生の慈父
として、之を濟度するの大使命を有して生れ給ふた
のである故、此の抱負此の意味を宿して彼の物語は
傳へられてゐるのであらうか。四方は横に廣く空間

し證を得ずんばこの座を去らじ」と誓ひ給ふたので
ある。此時伽耶の御山に月隠れ、菩提道場音も無く
識浪「法界定」に静まりて、光鋒すでに眉間の白毫
に漏れ、大悟徹底の豫感は早くも金剛寶座に漲り渡
つた。

こゝに欲界の大魔王は菩薩金剛寶座の動ぎ無きを
見て、すはこそ怨敵佛弟子彼處に在り、三界流轉の
我が領を掠め取らんとたくめるぞ、我が一大事魔界
の危機此の時に在りと爲し、有らん限りの秘術を盡
して成道を妨げんと試みたのである。菩薩の心を燒
亂せん爲に魔王の施すべきは硬鞭の二法あり、魔王
は先づ三魔女を遣して其の妖術を試みしめ、幻影怪
しく媚態を盡して亂舞せしむるや、菩薩は靜かに冥
想の眼を開き、僅に一呵し給ふに、魔女は忽に愛染
の美を失ひ、醜き老婆の姿と化し去つた。魔王は大
いに怒つて今は一億八千の魔軍を集め、刀箭劍戟を
閃かし十方より金剛寶座に向つて殺到した、雷鳴地

的に十方の世界を意味し、而て七歩とは四七二十八
宿を月が遍歴する、その即ち一月たり一年たり乃至
永遠の時間に亘りて堅に無量の世を表す、即ち時空
に逼く如來の大化導は我等が上に行はるゝを示して
ゐるものであらう。

而て此の傳説は、佛陀が過去世求道の梵志（修行
者として）現れし時、其の時の誓願の言葉と對照し
見て一層感慨深きを覺えるのであるが、其は後に讓
り、此の誕生時の唯我獨尊の御言葉は、實に太子が
出家苦行し、多年修行の功成りて今や菩提樹下に開
覺成道せんとする前、菩薩斷惑の危機を醸せし彼の
降魔の事實に由來して居るのであるまいか。菩薩
悉達太子が六年苦行の林より出で、尼連禪河に沐
浴し身體氣力を恢復しつゝ遙かに北方伽耶の里なる
大畢波羅樹の下は、三世諸佛の道場たるに相應しと
聞き、踴躍して急ぎ其の地に至り、村童より吉祥草
を請ひ得て壇上に敷き、此處に結跏趺坐して「我若

鳴均しく起り黒雲天に渦まき異形の夜叉羅刹は空を
蹴立て、疾驅し怒號咆哮の聲凄まじく十方に響き渡
つた、魔王は風輪を投げて颶風を捲き起すも、菩薩
金剛身の一毛をも動かす能はず、雨伯を驅りて洪水
を汎濫せしむるも、菩薩の寶座の一隅をも浸す能は
ず、箭の雨も火の雨も寶座に近づけば繽紛たる妙華
の雨と爲つて四散する、火も燒く能はず水も漂はず
能はず刀も斬る能はず毒も害む能はず、菩薩は終始
湛然自若として磐石の如き禪定に住し給ふたのであ
る。

魔王は愈々憔悴し「寅の一天早や近し、彼れ金剛
の後心を得ば我が通力も甲斐無けん、總軍いでや」と
叱咤の聲もろとも今は劍を座前に擬し自ら菩薩に
肉迫して「比丘よ、樹下に趺坐して何物をか求むる
速かに去れ、汝は金剛座に値ひせざるものなり」と
叫ぶ、菩薩言下に答へて云く「天上地下、此の金剛
寶座に値ひする者は唯我一人のみ、地の神よ、速か

に出で、之を證せよ」と、禪定の印を結べる右手を右膝に當て、大地を指し給ふ、刹那に百電たばしる萬雷の響きして大地震裂し地神涌出するや、其の響き轟然として魔膽を破る、魔王驚愕して畏れ戦き忽ち姿を消し醜軍算を亂して四散し去つた。之を菩薩の降魔と稱するのである。

此の快舉に依つて菩薩は精神の大平和に達し、其夜明けなるとする時「三明」を發得して無明の闇を破り、竟に開覺成道し給ふたのである。茲に則ち佛陀は第二の誕生を迎へ給ふたのであつた。否さきに人は人の子としての肉體的誕生であり、今こそ心靈界に於ける覺者として法王として、眞に「佛陀」そのもの誕生であると云ふ可きであらう。而て此の成道に先立つ降魔に際して、菩薩が法界の禪定より「指地證印」を以て地神を呼び出し、魔王波旬を一喝叱咤し給ひし時の「天上地下此の寶座に値ひする者は唯我一人のみ」といふ此の言葉が、かの四月八日誕

十年化導の御生涯は、實に佛陀が其の證得體現し給ひし大理想を如何にして衆生にも亦體得せしめんかと、み心を勞しつゝ其の大法を、遍く一切世間に宣布唱道せられたるもの、即ち釋迦牟尼の大人格の社會性の完成であり、又之は「慈悲の使命」の完成であり、即ち佛陀の力用の大覺他面の絕對的發揮であつたのである。此に於て眞に覺者佛陀の個性と社會性と、自行面と化他面と、いはゆる自覺覺他覺行窮滿なる人格の絕對性は遺憾なく發揚成就せられたのであつた。佛陀の人生は實に其の前半を哲學者求道者として禪かに深く宇宙の大真理を思索し冥想し洞觀し、智の鏡を磨ぎ澄まして理の世界を悉く此に映寫し了り、其の後半は宗教家經綸家として透徹せる大知見と烈々たる大慈悲とを以て世の群迷を化導し救濟し、宛かも月清涼の光が曠野にさまよへる旅人に路を示すが如く、如來月愛三昧の慈光は、無明の闇に塞され居る世のもろ人をひとしく涅槃解脱の

生の時の「天上天下唯我獨尊」といふ言葉と爲つたのではないであらうか。カピラエ王國の「血族の使命」を荷つて世に出でませしいはゆる肉の誕生の時既に此の精神的使命を荷つて生れ給ひし悉達太子が後年御齡三十歳十二月八日の精神的誕生こそ、始めて人間の世界に佛陀の光臨を仰ぎ得、人文の歴史に佛陀の足跡を印し得たる第一日であつたのである。而て是は、釋迦牟尼の大人格の絕對的完成であり特に個性の完成であり、「智慧の使命」の完成であつた、即ち自覺覺他覺行圓滿なる佛陀の大自然の完成であつたのである。

さて佛陀が悟後の觀念に於て具さに轉法輪の次第一と方法とを熟思せられ、やがて梵天の辯詰に應じて北進して鹿野園の五仙比丘に四諦の法輪を轉じ給ふた時、こゝに佛陀は始めて社會的に誕生せられたのであつた。是佛陀の第三の誕生と言ひ得るであらうそれより後、鷲峯說法娑羅林入滅の夜に至るまで五

城へ清淨眞如の都へ導き入れ給ふたのであつた。世尊一代の行化圖かに竟りて跋提河畔娑羅林の雲に隠れ給ひし涅槃は、實に佛陀第四の誕生であつた、まことに佛陀の永生の誕生であつた。如來世尊が其の御名の如く、眞如を體現せる處より活動し來つて、光を和らげ塵に同じて衆生に隨應し、人界世間中の最尊として慈心もて世間に遊化し給ひたる、其の人間性の釋迦牟尼佛より、遂に佛陀の自己自身の境界たる——如來理想の境界たる——三德秘密藏の常樂我淨の境界へ、誕生し給ふた、否還り給ふたのであつた。さて此の境界は何の使命の存する所であらうか。佛陀は既に自己人格の個性的無限の自覺的完成としていはゆる「慧解脱」も、また社會的無限の覺他的完成としていはゆる「慈心解脱」も、均しく共に成就體現せられたのである故、智慧も慈悲も圓滿無限である事は言ふまでもないが、特に佛陀出現の意義否佛陀の存在そのもの、意義が、衆生濟

度の唯一大事に存する事を思へば、這般の消息はおのづから明かとなるであらう。衆生救済を離れて佛は無い、佛の使命は無い、單に冥如の覺目を眺めて自受法樂するのみの佛は無い。眞理も智慧も慈悲も一切の善根功德神力を悉く慈悲に籠め慈悲に包み慈悲より發して、常住不斷に我等衆生に隨應し應同じ感應し、以て度生說法哀愍救護の恵みを垂れ給ふが佛陀の眞面目たり我が信仰の神髓であらねばならぬ。而も佛陀の入滅が始めて永生の誕生ではなく即ち此處に始めて不滅の佛と成つたのではなく、況んや佛陀の出現成道は、初め迷の凡夫として此世に生れし悉達太子なる一衆生が、修行多年の後始めて漸く覺を開きて佛と成つた「成道」したといふのではなくして、本より佛たりしものが、衆生を救はん爲に人として此世に應じて來り現れ給へるものいはゆる「示現」なり「應現」なりとして、從つて我々は、人間より佛と成つて此世より涅槃の彼岸に

去られし「如去」の「人釋迦」の後姿を拜むのではなく、もとゞ覺の境界にゐませし御佛が、まさしく佛として此の人間に來り給ひし其の正面を我々は拜して居るものとして「如來」「佛釋迦」の信仰として佛と我々との救ひ救はれる關係が無始久遠劫來より大因縁ありし事を、今正しく我等の眼前に如來親ら實證し給ひしものなる事を深心に信解し奉る時、こゝに我が釋迦牟尼佛は既に無始の久遠に實に成道し給ひ居る「本覺の佛」——「本佛」として久遠劫の昔よりこのかた我等の大恩教主大恩師父即ち主師親三徳の大恩徳主なる事が、歴々として佛子信仰の心に映じ來るであらう。此の娑婆世界菩提樹下「始覺」「成道」と見し佛は、豈圖らんや「久遠實成」「本覺」の「本佛」に在りましたのである。歴史の佛陀釋尊は、實に超歴史的——否、時を超え時を包み自由に時の内に現れて衆生救済の佛事を作し給ふ——全法界の一大中心たる本尊の御佛であつたのである。

佛も此の人格實在の本佛釋尊が、さきにも言へる如く、一切の恩徳の中特に慈悲を中心として永への我が親として父が愛子を念ふが如く母が病兒を撫はるが如く、晝夜不斷に何時如何なる時も、「毎に自ら是の念を作す何を以てか衆生をして無上道に入り速かに佛身を成就することを得せしめん」と我等を樹はし我等を導き、「我常に衆生の道を行じ道を行ぜざるを知つて度すべき所に隨應つて爲に種々の法を説く」なる哀愍感應衆生救済の御佛なる事を佛子我等は誠に一心に信受し奉らねばならぬ！之を本佛釋尊應身常住の妙化と稱するのである。我等の此の宇宙は實に是かる御佛の遍滿無限の大慈悲に包まれて居り、我等は實に是かる圓慈の裡に生息して居るのである。

(續)

南無妙法蓮華經

新 加 盟 者

- 東京市小石川區三軒町八 栗山和喜雄殿
- 同 同 大塚坂下町 矢吹友品殿
- 神奈川縣平塚市須賀北町 久保田英樹殿
- (磯部氏御紹介)
- 東京市本所區太平町三ノ四 片岡樸次郎殿
- (池田悦太郎氏御紹介)
- 同 豊島區雜司谷町一ノ三五〇 永島三郎殿
- (河合勝明氏御紹介)
- 同 同 高田本町一ノ三八 栗城卯太記殿
- (北條平太郎氏御紹介)
- 山梨縣南巨摩郡身延山 勝部亮運殿
- 甲府市東三條通四十四 功力正則殿
- 同 八田町十三 平井出武男殿
- (高野毅氏御紹介)

日什上人諷誦章講話 (其六)

梶 木 顯 正

九、更ニ開述顯本ヲ明ス

開ニ遠本者、顯ニ三身一身之自受用也

この文は、上の廢始覺顯本覺云云の文を受けて、更にその心を釋されるのである。「開ニ遠本」とは文字の通り遠い本を開くといふのであるから、根本とか眞價を開き示す意味で、壽量品に明される所の伽耶城を去ること遠からずして正覺を得給ふた釋迦如來様の佛格(佛格とは大悲の權、化なるが故に云ふ)、即ち根本眞價を開いて見せしめるのは何の爲かと云へば「顯ニ三身一身之自受用也」で三身とは法華經の壽量品に「或ハ己ノ身ヲ示シ或ハ他ノ身ヲ示ス」とある中の他の身を示すを云ふ、即ち久遠本地の釋迦如來が千容萬態の分身の佛菩薩を發現し給ふを云ふ。一身とは根本本地本覺の如來の一身を云ふ。「自受用」とは如來御自身の持ち給ふ御力用といふ意味で、一ツは御自身が功德を積み給ふ爲め二ツには他を救濟し給ふ即ち

化他の爲め、二様の御身を示現し給ふのは、徹底したる如來の大慈悲心が自然に救ひの容ち恵みの手となつて現はれ出て來るので、それ等は皆本地本覺の如來御自身の力用、御徳、御眞價、御尊貴を示したものである、との謂である。

十、應身ノ權威ヲ明ス

應用豎ニ高三世ニ、利益横ニ遍ニ十方ニ

此の一段は佛敎として、又日蓮主義の敎學として非常に重大な意義を持つ一段で、全佛敎の死活問題は懸つて此處にあるのである。若し佛敎徒にして釋迦如來は八十歳を以つて拔提河畔に入滅し給ふて今は如來は在さずと云ふならば、理窟は如何に巧妙に立てたにしてもやはりそれは理窟であつて、衆生を永遠に救ふと云ふ佛敎本來の生命は中斷される事となるのである。のみならず宗教としての生命價値を失ふのである、でそれは法華經の壽量品を拜せざる限り永久に如來の不滅常住は明かにならぬのみならず、應身の權威を發揮することを得ないであらう！ 御開山日什聖人の絶叫し給ふ信仰運動の中心歸結は此處にあるのである。「應用」とは哲學上で云ふならば本體に對する現象といふに當る、本地本覺の釋迦如來が大慈悲の自然的發動として、三身一身と云ふやうな千態萬容の姿を現し給ふを云ふ。「豎ニ」とは時間的にズット前後を永遠に一貫すること、「三世」とは過去、現在、未來の三世の上に衆生

救済を本願として活動給ふを云ふ。利益即ち救ひの功德慈悲の恵みは「横遍」とは横は空間的に廣く十方法界に及んで遍即ち行き亘つて居ることを云ふ。高とは横に廣くに對して、堅高と仰せられたのである。即ち壽量品の意から云ふならば釋迦如來は假りの姿を以つて現はれたる即ち現象の佛の如くに見えるけれ共事實はさうでは無い、根本本佛が其の儘本地の姿を現象の相に包んで出て居るのである眞物が衆生の機根に應じて濟度の爲にカヅラを着て出て居るのである。と云ふのを一應用堅高三世利益横遍十方」と仰せられたのである。

十一、本化四大士ノ權威ヲ明ス

次上行等之四導師者、最初實成之弟子、久遠證得之菩薩、

結要傳受之居士、末法弘經之導師也

この文は、上行、安立行等の本化の四大菩薩は釋迦如來久遠々本からの御弟子にして、同時に又末法に如來の正法を弘通宣揚し給ふ、所謂内に久遠本地の古菩薩を秘して外に新成習學の裝ひを示されし弟子の權威を明された一段である。上行等之四導師者とは法華經涌出品第十五に説かれたる、釋迦如來が過去久遠の弟子の中の最古參第一位の弟子四人(行、四、安立行の四人の菩薩)導師とは今日の言葉で云ふ先

達又は正法を護持し傳道する人との意味。最初とは本來絕對にして三世十方に救ひを垂れ給ふ始め無き久遠本佛を、暫らく凡情に従つて始め有る佛と見てその一番最初と云ふ意。實成とは、上の始めある佛と見て眞實の覺を開き給ふた時のお弟子で、久遠證得之菩薩即ちその古い昔に如來の教を習ひ證した菩薩であつて、結要とは、如來一代の教法を法華經の中に、是好良藥の一丸として結晶したるをいふ。傳受之居士とは、此の要法一丸の藥を如來より末代衆生の爲に傳受した人で、末法弘經之導師即ち法華經の勸持品及涌出品等に説かれたるが如く、眞に五濁顛倒の衆生の充滿して居る惡世末法に、正法法華を弘める威徳兼備の大導師なり、との意味。何故に末法には斯の如き大權威を備へ給ふ四導師でなくては弘められないか? と云ふに、末法は總の方面に時代惡が發現して、人は三毒強情を募り、道を棄て、利に走り、徳を捨て、省りみず、政治は術策を本として國是を過り、教育は學を習ふて行を輕んずると云ふに至り、正邪の判斷が混冥して小人凡夫には施す術を知らぬ、と云つた時代である。故に大權威の聖者に非ずんば教へ難き時である、この故に此の四大聖者を如來は使として末法に送り給ふたのである。

十二、更ニ曼茶羅ヲ釋ス

凡此大曼茶羅者、依正不二、人法一體、生佛一如、十界互具之

大曼茶羅也

此處では曼茶羅を十界互具の意味に於て明されるのであるが、上に擧ぐる處と同じやうに曼茶羅を説明して法華圓教の融即無碍なる意を示さんとするので、「依正不二」とは依は所居の國土を指し、正は能居の人を指す、(委しくは依報) 丁度精神と肉體の二者が、二にして一と成つて居るが如く、佛と國土又は衆生と國土と云ふやうな關係が全くこの曼茶羅の上では不思議一と現はれて居る、と共に又「人法一體」として教法とそれを修行し證悟する人とは同じく一體と成つて居るもので、人の外に教法と云ふものは存するものではない。「生佛一如」とは衆生と佛とは本來一如して居るものだ、この意を明したので、哲理的にその本質へ這入つて見るならば全く平等體一で、これを云ひ換へれば迷悟不二と云ふのである。一如とは如同と云つて同一の意味である。「十界互具」とは上に説く如く佛界にも以下の九界を具し地獄界にも餘の九界を具すと云ふ様に、各一界に九界を具し合つて十界が互具互融して居る事を言ふのである。「之大曼茶羅也」とは以上擧げた如き意味を包み具して居る處のものが此の曼茶羅である、と結んで來たのである。で茲に注意を要することは上述の曼茶羅釋は實相同といふ理相平等論に立つた説明であつて、事相差別の側からは飽迄平等論を説く哲學と、絶對の救ひを明す宗教とは嚴然たる區別が有る事を忘れてはならない。(次續)

所感

中央教化團體聯合會々長

子爵 齋藤 實

昭和八年十一月十日、國民精神作興詔書發十周年記念克己日に當りて、齋藤首相の講演大要であります。文責在記者

顧みますれば彼の關東大震災火災の後承けて、民心其の方途に迷ふの時、これを鼓舞作興して其の趣く所を示し給ひし精神作興に關する 詔書が漢發せられましてから、早や十年の歳月を経過し、本月本日其の十周年を記念すべき日に當るのであります。今此の記念の日に當りまして往時を回想して感慨の更に新たなるものあるを禁じ得ないのであります。當時、殆ど茫然自失せんとしたる國民は實に此の詔書によつて一道の光明を認め、萎靡沈滞に陥ら

んとする人心も實に此の 詔書に依つて鼓舞激勵せられ、緊張の氣分は全國に漲り、復興の努力は眞に目覺ましきものがあつたのであります。幸に此の精神に依つて災禍の復興は其の緒に就き、帝都の美觀は却て震災以前に優るまでに至りました、是れ實に禍を轉じて福と爲す我が國民の傳統的なる底力が此の 詔書によつて振起せられたものに外ならぬのであります。誠に恐懼感激措く能はざる次第であります。而も、歳月の経過は次第に人心を頹廢せしめ、一時の緊張も兎角弛み勝ちになりまして、此の 詔書に「今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル」とまで憂慮あらせられた時弊は何の革むるなく、浮華放縱の習、輕佻詭激の風は、依然として行はるゝばかりでなく、寧ろ其の放縱の度を増し、詭激の量を多くせんとする傾向をさへ呈するに至つたのであります。而して國家現時の状態は彼の

震災當時に比して決して安定を加へたのではないのであります。誠に國際聯盟離脱に關する 詔書に「方今列國ハ稀有ノ世變ニ際會シ帝國亦非常ノ時難ニ遭遇ス」と仰せられてあります通り、世界的にも、國家的にも稀有の世變であり、非常の時難であります。世界大戰後に於ける引續いての財界の不況、之れに對する列國の自營と奮闘、殊に國際聯盟退後の我が帝國は斷じて人心の弛緩を許さず、今や我が帝國は列國環視の中心となり、而して内には農山漁村及び都市の回復未だ充分ならず、國家の財政は膨脹せざるべからずして國民に負擔を重荷せしめ難く、激思想其の間に乘じ、或は右傾し、或は左傾して中正を得難く、眞に國民的一大覺醒を要すべきの時機に際會して居るのであります。

此の時に當りて想ひ起しますのは「國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ」と仰せられた此 詔書であります。何れの國家が國民精神の剛健なくして興

隆したものがありません。我が日本は世界の國家が興亡幾轉變する中に、毅然として獨り興隆發展の道途を辿つて來たのも實に此精神を保持し來つたのに外ならぬのであります。國民精神とは國民協同、全體としての一致融合の精神であつて決して局部的な階級等に偏すべきものでもなく、其の剛健とは弛緩放縱に流れず克己忍苦の修練に耐ゆるの心であります。今日の弊は局部に偏して全體を忘れ自己の利害や階級の利害に支配せられて國家全體に關心すること薄く、目前の刺戟や衝動に左右せられて永遠の大計を閑却し、爲めに目前の慾望を制御し一時の苦惱に耐ゆるの精神を缺く所に存するのであります。吾々の生存は個人として若くは階級人としての生存でなく、國民としての生存であり、其生活の安定も亦國民としてのみ保障せらるゝので、國家を離れて其の生活の安定は保障せられないのであります。されば國民なくして國家は有り得ないのであります。

國家なくして國民生活は一日の安きをも保ち難きことを痛感し、常に國家全體の利害休戚に着目し偏私の心を去つて奉公の至誠を致すべきは國民の義務たることは申すまでもないのであります。況んや建國以來「義ハ君臣ニシテ情ハ父子ヲ兼ヌ」と仰せられし 聖旨を戴き、一家一族の親みを以て進み來りし我が國民生活に於て利害を共にし、休戚を同うし舉國一致の實を擧ぐべきは當然の責務であるのであります。

しかも國家は永遠の存在であつて、決して一時の儉安を許すべきものでもなく、輕舉妄動に依つて目前の計を立てべきものでありません。宜しく前途の隆昌を目指して克己忍苦の修練に耐え、現下の難局を打開するの意氣を振起せなければならぬのであります。我が帝國今日の時難は決して悲觀すべきの時難にあらずして興隆途上の一難關に過ぎないのであります。此難關をだに打開し去れば、前途には國運

隆昌の坦々たる大道は展望せられて居るのであります。而して此難關打開の鍵は實に此の精神作興に關する詔書を奉體し其の實効を擧ぐるの外はないのであります。

聖旨優渥、各般に亘りて教訓を垂れ給ひ、之を今日の世相に照らし其の光りを回らして見ますのに悉く時弊に適應して之が革正の方途を御示し下されて居らないものはないのであります。其の「教育ノ淵源ヲ崇ヒ、智徳ノ並進ニ努メ」と仰られ「綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ」と示し給ひ、其の「浮華放縱ヲ斥ケ實實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メ醇厚中正ニ歸シ」と思想生活兩方面に亘りて國民を戒飭し給ひし聖訓は直に以て現代人覺醒の指針とすべく、動もすれば家庭の紊亂を社會に暴露し翳せしむべき不倫の行動の報道せらるゝ今日「人倫ヲ明ニシ親和ヲ致シ」の 御訓誨は其の廓清を促し、農公共道徳頹廢の慨嘆せらるゝ今日、秩序ヲ保チ責任ヲ重シ

節制ヲ尙ヒ」の 御教示は此弊を戒め、特に「恭儉
 勤敏、業ニ服シ産ヲ治メ」と勸めて各自の生活に反
 省せしめ「一己ノ利害ニ偏セシテ公益世務ニ塌シ」
 と説きて偏私の害を矯め公共の精神を喚起し給ふ等
 移して以て現下の國難打開の精神的基準たらざるは
 ないのであります。

聖訓、柄として萬古に亘るとは申しながら、移し
 て以て、今日の時弊に中るの一事は 先帝の憂慮し
 給ひし時弊、何の革むるなくして今日に至る怠慢の
 罪は、抑も何れに向つて謝し奉るべきであります
 先帝、神去りまして、早や七星霜 詔書渙發以來
 十周年、今にして反省せずんば 先帝の軫念したま
 ひし文化の紹復、國力の振興、其れ何れの日にか期
 することが出来ませう。

十年の日月、夢と過ぎて、國家は今非常の時艱に
 際會して居るのであります。滿洲問題は尙ほ前途大
 に考慮すべきものあり、國際關係も幾多の難局を豫

思 親 閣 へ の 道

本國へいたりて今一度父母の墓をもみんな思へど
 も、錦をきて故郷へはかへれといふ事は内外のお
 きてなり。させる面目もなくして本國へいたりな
 ば、不幸の者にてやあらんすらん。これほどのか
 たかりし事だにもやぶれて(かたしと思はれし佐
 渡御流罪の赦免されしこと―筆者)鎌倉へかへり
 入る身なれば、又錦をきるへんもやあらんすらん
 其時父母の墓をも見よかしと深く思ふ故に、いま
 に本國へはいたらねども、さすがこひしくて、吹
 く風、立つ雲、までも東の方と申せば、庵をいで
 へ身にふれ、庭に立ちて見るなり。―光日房書―

聖祖が、御齡六十になん／＼として、尙なき父君
 母君を慕はれ給ひ、山麓の御庵室から高き山頂へと

想せねばならぬのであります。而して國內の狀勢も
 亦斷じて儉安を許さないのであります。此時此際、
 國民が反省自奮するなくして、如何にして前途の光
 明を待望することが出来ませう幸に國民更生の聲は
 此反省と自奮とを促し、今や其の意氣漸く振はんと
 して居るのであります。更に此意氣に一段の策勵を
 加へ、速かに時弊を革正して 先帝の神靈に答へ奉
 り、十年前に一たび振ひ起したる此精神を更に更生
 の意氣を以て之れを倍加し協贊邁往、此の時艱に處
 し、以て 天皇陛下の詔示し給ひし「皇祖考ノ聖猷
 ヲ翼成シ、普ク人類ノ福祉ニ貢獻セムコトヲ」期し
 我が國家興隆の基礎を鞏固にせなければならぬので
 あります。

今日此精神作興に關する詔書渙發十周年の記念日
 に際し、聊か所感を述べ、諸君と共に更に新たなる
 感激の下に興起して此 詔書の奉體に邁進せんとす
 る次第であります。

貝 塚 生

五十丁の險路を冒されては、日々に故郷安房の方を
 瞻望あそばされしと云ふ、身延山奥之院、思親閣へ
 の道である。

祖師堂の脇から踏み出して、馴れない上りの山路
 を汗をふき／＼一時間餘りも登つて行つたら、懸て
 祖師堂と思親閣との丁度中央に當ると稱する三光堂
 へ着いた。時代のせいか相當にいたんだ高い四段造
 りの石の台座の上に、合掌跏坐する一體の佛像がす
 るてある。露地佛なのである。台座の高く大きい割
 合には佛像が少々小さすぎるし、第一、肝心の佛像
 そのものが審美的に果してどんなものか一向判らな
 いが、一時間餘りの山路に幾分自然からの壓迫を受
 けつゝ登つて來た身には、兎に角無條件に慕はしい

ものであり、又同時にありがたいものでもあつた。この三光堂までの廿五丁は、道はよし、所々にベンチの設けはあり、道しるべが多い上に又登りたてどて體力の餘利もまだある。従つて肉體的には大して苦しいとも思はなかつたのであるが、唯、直々とした杉木立の中を行くので、力を鼓舞してくれる青空は、木と木の間にはさまれて歩く道の上に一本、帯の如くに僅に遠く見えるだけであり、加ふるに登る一歩々々に面白く移り變つて行く可きあたりの展望も木々に遮られて更にきかぬ。勿論深山大澤の中を行くごしも思はなかつたが、さう申すには少々人工が加はりすぎである。たつた一人で進む而も自然には全くなれぬ私には、これ等はサー／＼と高い槍を無氣味に拂ふ風の音と共に、ある種の軽い壓迫を感じしめずには置かなかつた、寔にひ弱い次第ではあるが、事實は何んど云つても偽れの事實である。馴れた街衢の喧噪には別段おそろしさは覺えぬも、人氣のない自然の寂寞さには云ひ得ざる感壓を蒙らすに足らないのである、小さい時からよく自然に呢んで來た人々には、これは全く反對であらう。又、今

日の置置狂騒は恐らく夢想だにもしなかつたらうと思はれる非都會的な昔の人達には、それだけに餘計自然への深い和親も懐き得たであらう、今日より時代が遠ざかれば遠ざかる程に益多くの自然詩人を見出すのも、亦大いに宜なる哉である、が茲に、いかに昔の人が今の人以上にたやすく自然に親しんだとは云つても、一人の聖祖とおしかぶさる様な身延の自然とは、一體どんなものであつたらう。身延の自然を天衣無縫の靈筆で描き出す聖語を。今改めて引用しようとは思はない。たゞ、それが如何に重壓性に満ちたものだつたかは、御遺文の少しでもを拜し或ひは親しく身延に詣で、ありし昔に思ひ至れば、自ら明瞭なことなのである。人足繁き今日でさへ、尙所に依つては壓迫を與へる身延の自然なのであるましてや何百年か以前のこゝが、いかなるものであつたかは誠に想像に難くはない話である。飛鳥すらよう飛び得ない峨々たる山屏風をグルリ四方に立て廻したその中に、これは餘りにも小さな草庵を結ばれて、草木は森々、大石は連々、晝は日のみす、夜は月を拜せず、問ふ人も稀なれば道を踏み分くるに

も難いと云ふ状況なのである。三光堂への途中で早くも押された私などには、鳥渡考へたゞけでも已に堪へ得られない自然である。こののしかゝる自然に對して、聖祖がいかに處せられたかは、建治元年八月の身延山御書冒頭の一節に美しく語られてゐるのである。あれ程の融然たる自然觀が、他に又とあらうか、或ひは問ふ人あつてあの文章は單なる言葉の綾だと云ふかも知れない。が、私には、聖祖が假にも偽りの修辭を弄する方だとは絶対に思へないしそれにあの自然と完全にとけ合ふた前後九年に亘る尊い御生活を拜しまつれば、それが單なる言葉の綾では決してないと、直ぐにも氷解される處である、或は又疑ふ人あつてあれは、聖祖の寛く深い内親内省を身延の自然に托されたので、必ずしも眼の前に展開された自然觀ではあるまいと云ふかもしれないが、重壓する自然の中にあつて、それだけの内親内省を遊ばし得るならば、それは直ちに自然三昧にお浸りになつてゐた有力な證左にさへなるのではあるまいか、勿論、そのお筆の中には、崇高な御内親も織り込まれては居らうけれど、先づ御言葉通りに、

聖祖の自然觀として、此の身延山御書の一節は扱つてよいであらう。(その執筆が、聖祖には非ずして實は日持上人らしいとも云はれるが、今の場合、全く問題ではない。)

誠に身延山の柄は、ちはやふる神も恵みを垂れ、天くだりましますらん。心なき賤の男、賤の女までも心を留めぬべし。哀れを催す秋の暮には、草の庵に露深く、檐にすだく蜘蛛の絲たまをつらぬき、峰の紅葉いつしか色深うして、絶々に傳ふ寛の水に影をうつせば、名にし負ふ龍田河の水上也かくやと疑はれぬ。又後ろには峨々たる深山聳えて、梢に一乗の果を結び、下枝に鳴く蟬の聲しげく、前には湯々たる流水湛へて、實相真如の月浮び、無明深重の闇晴れて、法性の空に雲もなし。かゝる幽なれば、庵の内には晝は終日に一乗妙典の御法を論談し、夜はよもすがら要文誦持の聲のみす、傳へさく釋尊の住み給ひけん靈鷲山を、我朝此砌に移しおさぬ。

時には、底氣味悪くもあつたらう身延の自然が、聖祖には斯く美しい詩境に變つたのである、昔の人は、たしかに今日の人から見て、遙に自然には親

しみ易かつた筈である。併し、此の聖祖の自然觀をも、かゝる單なる範疇の中に當嵌めて、一概に片付けて了つてよいであらうか、それには餘りに偉大な自然三昧であり、且つは又餘に幽遠な自然の莊嚴境である、たとへば通途の自然詩人の様に、無常觀を基點とする自然の閑寂境に滲透するのさへ容易なわざではないのだ。況んや終窮究竟の大乘的見地から、自然を大莊嚴化する底の境地に至つては、誠に尋常一様な範疇では片付けられないのである。

憂きわれをさびしがらせよ閑古鳥 芭蕉

いゝ句だ。至りやすからぬ境地である。これ以上の詩境は鳥渡ありさうにも想像出來ぬのである。が、一度身延山御書に現はれし、聖祖の御詩境に思ひ至る時、少くともこの私には、彼の味ひし以上の自然觀なり詩境なりの正にあることを明瞭々と示されるのである。無常觀に終始する多くの人には、おそらく彼の境地を以つて最高最深のものとしよう。醍醐一實の妙道に活ふた者には、其の詩境にうたれながらも、向心の一隅にごこ満たされぬものあるを覺えるのである。聖祖の御詩境——これをこそ、八百

の眼の功德、千二百の耳の功德、乃至千二百の意の功德を得し結果と云はずして何としよう。實に普通の範疇を突破した御詩境なのだ。私は、法師功德品の六根清淨を、こゝに始めて眞實現前の事實として領き得るのである。それから、多くの人々の中には聖祖を以つて折伏逆化一點張りの所謂ユトリに乏しい没文學的な方の様に思ひなす傾向が強いが、さう云ふ場合さしづめ此の御文章などを擧げて、人に餘り知られぬ、聖祖の豊かな御詩境を語つて見たい氣がしてならないのである。

三光堂の露地佛にスツカリ精神の平安を取り戻して少し行つたら、暫くして進む右手が展げ始めた。眼の下遙かに、一本走る往來へ左右からしがみ付く身延の町の家々が、小さく／＼見える。水の割に河原ばかり馬鹿に廣い富士河が、時々雲間を洩れる太陽の光線にギラ／＼照りながら流れてゐる。河向ふには、名を知らぬ山が途眼近かに列んでゐる、上には廣々とした空がある——いつか雲が出て了つてはゐるが、こゝに至つて始めて山を歩いて行くらしい實感湧いて來た。麓のことには道の右脇に一寸大

きな岩が背を出してゐるのを見出した。富士見岩なのである。無残にひき倒された立札を起して、土を拂つて文句を讀んでみる。

富士見岩。青山の下に富水の禁紆せるを俯觀し、巖嶺の嶺に富嶽の秀麗を望む。遙かに北方に掩護たるは甲府盆地、百歩九折の羊腸も此處に至れば手を以て膺を拊ち、風光の美に快哉を叫ばずんばあらず。

正に此の通りである。文章にも鳥渡眩惑されるが、場所にも事實打たれて了ふ。たゞ「富嶽の秀麗を望む」とは云つても、富士山は向ふの山陰から僅に少々顔を覗かせてゐるに過ぎない。尤もそれでよい。空容がまともに見えようより、チラリと顔を出してゐる處にこそ趣があつて、富士見岩の富士見岩たる値打ちがあるのである。下から已に二時間餘、肉體的に漸く疲れ始めた身體を、そのベンチに休める思親閣への道は、現在餘りにも出來すぎでゐるのである。古のおもかげは思ひ浮ぶ可くもない。その昔、聖祖が山頂への道は——道と書かうより徑と書いた方がヨリ適切であらう——、果してどんなであ

つたのだらう。「荆棘を披き巖を履み葛藁を攀て絶頂を究む」と云ふ智寂省師の文が、蓋しその眞に一番近いものではないかと思はれるのである、それにお登り口にしても、今とは全く違つてゐた。ソモソモ久遠寺の伽藍を、鷹取山の麓なる西谷の舊地から今の場所へ移したのは、身延第十一代行學院日朝上人なので、いきほひ今の祖師堂脇からの登り口は日朝上人以後のもの云ふことになる。(日朝上人は聖祖滅後約二百年程の人、尙、第十二代圓教院日意上人第十三代資聚院日傳上人の二師を加へて、朝意傳の中興三師と稱し、祖山の興隆はこゝに始まつたのである。)聖祖御自身は、西谷の御草庵からじかにお登りなされたのであつて、現存する麓坊の場所は、そのお登り遊ばされた麓に當ると云ふので、坊號までかくは名づけられたのである。當時の道は定めて歩きつらい險しいものだらう。今のいゝ道を歩いて、かりそめにも疲れたなどゝは口に出せない筈である。麓坊が出た序に附け加へるが、土地の人にきくと此坊の上約十丁ばかりの所に、六老畑があつて、昔は名の如くそこで六老僧などが農作したもの

だと云ふ、御草庵からは一寸離れ且つ不便とも思はれるが、元々狭い場所なのだから、これも亦止むを得ざるにいたたのであらう。中村吉藏氏の「豫言者日蓮」には、身延の場で「聖祖が鎌をかついで出てこられる處がある。霧立ち嵐はげしき折々も、山に入りて薪をこり、露深き草を分けて、深谷に下りて芹をつみ……」などと云ふ身延山御書の御言葉から推察したり、それにこの六老畑の存在をも思ひ合せれば、聖祖が勿體なくも鎌をかつがれた御風姿も、纏て瓢中に描き得るのである。六老畑は又丹雀畑とも呼ばれてゐる。

ベンチを立つて少し進み振り返つて見ると、富士山が富士見岩の所で見たよりは餘計に顔を出してゐる。雲が程よくかゝつて、味ひは一入である。富士山ばかりは、私には生きて見える。地理學上の冷たい一ツの山とはどうしても考へられないのである。一般に呼ぶ場合でも此の山だけは、富士サン——Mt. Fuji——とアクセントする。それは決して富士山——Mt. Fuji——ではないのである。一般にも生きた富士山なのであらう。富士山は山の恰好をした人なのだ。魂もあ

れば、息もしてゐる、今こゝから呼びかけたら、オオと直ぐ返事をしてくれるだらう。どうしても生きてもゐる富士サンである。

「卅八丁目」——道のりを書いた古い石が路傍に立てゝある。大分苦しくなつて来た。何としても四頭股筋がヒドク張り始めた。普段平地を歩く時の様には素直にこつちの云ふことを聞いてくれぬ。

「日朝上人の井戸」——牛歩に通る。

「東照宮」——蝸歩に過ぎる。

「四十八丁目」——終に結滞だ。別に上半身の方は疲れたと云ふわけでもないのだが、足が前へ出ぬ、足がまわつて了つたのである。夢中、人に追はれて然も進めぬ姿よろしくである。氣ばかりあせつて肝心の足は少しも前へは動かない。あとモウ二丁だと緊張はしても、一歩にして休み、二歩にして憩ふみちめさである。自分の歩きづらいつけても、この山坂を——現在とは話にもならぬ程險阻だつたらうこの山坂を、日毎に登られた。聖祖の御事どもが厩裡に往來して、感慨はいたくも迫つて止まない。

山頂についた。足のシヨコを全く解かれたのであ

る。馴れない山路は本當につらいものだどツクツク痛感した。上り二時間廿分。山に馴れた人は、この半分位で登つて了ふと云ふことである。山の上には坊の人と堂を守る所化さんの外には、登詣者は一人もゐない。日の長いのをいゝ事にして、午後も可成り廻つてから登り出したので、登る道々あふ人は皆下るばかりであつた。登る者は恐らく私一人であつたかも知れない。山頂は流石によいと思つた。雲が相憎出たので周囲の山々は模糊としてさだかには眺め得ず、高さにも尙高い大空はあたらおひかぶさつてはゐたが、尙登臨の快は貪り得たのである。

聖祖、大孝のいたす處身を終るまで考妣を戀慕し日々此の山頂に登り給ふては遙かに桑梓を瞻望されたと云ふ。今、その山頂に一人立つ私に、たゞ許されたものは、合掌唱題の後の黙想のみ。寔に絶言歎の許されるばかりである。安房の國はどの邊に當るものかと迷つてゐたら、いゝことに堂から所化さんがやつて来た、ついてきくと、この方角ですと教へてくれた。本當にこゝから房州の山が見えるのですかと續いて聞けば、秋の氣の澄んだ日には鋸山が遙

かに肉眼で見えるとの返事だ、全くですか——とあつた。とを繼がうとしたが、これは又つまたぬ問ひが、浮んだものだ、危くのぞ元で喰ひ止めたのである。いらぬことだ、こんなおろかしい問ひは。房州の山が肉眼で見えるか見えないかは、一更か、はりのないことである。うるんだ心眼の走るあれば、それでよいのであらう。初めに擧げた光日書の一節は、この場合に來つてぞ、心して味はれねばならないのである。

これまでよく寫真で見てゐた瀟洒な二王門は、丁度改築中のためスツカリ取りくづされてゐた。矢張り、ある可きものがある可き場所にないと、どうもあたりの纏りが付かぬようである。奥へ行つて印を貰ふ。堂の隅の腰かけに一ト先づ落ち付いて朱を乾かす。「身延山思親閣奥之院」——樹型の中に三字づつ三行にして楷書で「身延山、思親閣、奥之院」——この九字には無限の秘音が込められてゐた。見入る眼がしらが、何の理窟もなしに、唯々あつくなつて來たのである。文字に籠る無限の響を、今ぞ初めて

私は聞き得たのである。身延山、思親閣、奥之院、それ等の奥底に秘めて懐かれる、いみじくも尊い、長き歴史を克明に追ふにも及ばない。三ツが三ツ、皆、現前のそのまゝでよいのだ。何と神秘にも近い文字達なのであらう。己れの主観をこゝに申し加へようなら、私は、視覚を通じての字割からの感じより、ミノブナン、シンシカク、オクノインと、聴覚を通じての字音からの味ひに、ヨリ深い響をきくのである。澄音、濁音、鼻音、交錯の妙や正に舌頭に百轉す可きであらう。こゝには外に、元政櫻や、聖祖が御兩親と恩師道善御房と日本國とのために御手植になつたと傳へられる杉の原木が四本ある。

人なき山頂に、私は時の迫るのも忘れて低徊去るに忍びなかつたのである。この幽閑境に、聖祖九年の御生活をそれからそれへと思ひ巡らし、胸は一杯になるばかりであつた。だが、最も正確に云へば、此の山頂だとあたりの展望を除けば、どこかに末世の息遣ひが視られる。まして下の俗化は、詮ないことだ。自動車は總門を乗入れ、更に近くは山門をも侵して本行坊の脇まで進まうとしてゐる。町の風

情は全く遊山地のそれだ。坊々の宿泊設備の商賣化してゐるのは云ふまでもなく、六老僧の宿坊には賣薬までしてゐる所がある。數へ始めれば際限がないこれを止むない時の流れだと云ふには、遠い昔が泣きもしよう、身延も感取もしてあたりの山々も、尊い山容は依然として昔を無言に語つてゐる。流れて盡きない身延の河は、昔ながらのせゝらぎを今に續けて傳へてゐる。時の力のどんなに強いものかは知らないが、何と云つてもいたましい俗化なのである。私は、身延の第一日に有難さ忝なさの信的興奮から先づ涙の洗禮をうけ、第二日には漸く落ち付いてそこいらを見返してはコレハなと驚き、終に第三日にしては全く幻滅の悲哀を強められたのである。身延三日の滞在にせめてもの印象は、この思親登詣と毎朝の本堂に於ける勤行とであつた。



教 報

本部 團 報

法華經講座 齊藤首相は教化立國を標榜されて居られる、これ寔に吾等の大に敬意を拂ふ所であるが、教化に於て單に當面の教化運動にのみ止まらず、更に進んで永遠の根柢深き教化方法にも着眼してほしいものである。それには卒直に申せば御自身が先づ宗教を鑽仰され、敬虔の念を以て信心を致し國民に範を垂れて頂きたい。かのロードジョージの如く又アリス、ケエムスの如く親しく教會に來つて羊のやうに、即ち本講座に自發的に來聽さるゝ事をお勧めする。本講座は實に護法愛國の表面化したもので、毎週木曜日の晩に小林一郎先生が全力を傾注して敷衍せられつゝある教化運動なれば、これこそ帝都の誇りであらう。

日曜日講演 午後二時より左記の通り修法と講話を管された。

- 十月二十九日 第五日曜日
- 信心と感恩 磯部 滿事氏
- 修養 磯部 顯正師
- 信仰の基 山口 智光師

十一月五日 第一日曜日

信仰の経路 入正定聚

- 和賀 義見師
- 磯部 滿事氏

同日 十二日 第二日曜日

本日は、朝香宮紀殿下允子内親王の御尊儀を豊島岡で誓まつるゝに當り、本團は其御通路でもあり特に、小西日喜師を大導師として午後一時半より法要を虔修した。

同日 十九日 第三日曜日

閉會挨拶

- 河合 諺明氏
- 磯部 滿事氏
- 小西 日喜師

當日は本團の趣旨に共鳴されて一名八團を申込みられたことを感謝する。

地方布教 十一月十八日(土) 晚六時より、甲府に於て愛國護法の方々が發起され、非常時日蓮主義大講演會を本團の主催として、同市の教育會館に於て開催した。數年已來宗教講演の催しが無かつた市民へ如何に呼びかけるかは相當苦心を要する次第である。權に曰

世は正に非常時！曰く經濟國難、五・一五事件將又一九三六年の難關、諸君にして是に備ふるの覚悟ありや、吾人は非常時に逢れず、非常時に際して確固たる信念を以て進む者なきを恐る。立てよ市民諸君、百千の更生對策も今やむなし、日本を救ふは信念の一途あるのみ、血を以て綴れる日蓮が更生對策を聞け！

時こそ違へ、鎌倉に元寇の大難關を突破せる日蓮の信念こそ、今日の混沌たる非常時に處する唯一の指針なりと信ずる。云々。非常時の警鐘として、非常手段に訴へ同會者一同全力を擧げて準備された甲斐あつて、しるしに廣い會館も空席を見ざるの盛況で、左記の順序に法要は開展した。

- 閉會の辭 中澤 欣吾氏
- 日本精神と本團の使命 磯部 滿事氏
- 信仰の妙境 田中 道爾氏
- 東洋文化復興の期 上田 辰卯氏
- 日蓮聖人御出現の大因縁 和賀 義見師
- 非常時局と日蓮主義 男爵 井上 清純氏

閉會宣言 峽中數百の士女に何物を興へたであらうか、十時散會後約一時間にして皆の快晴にも不拘慈雨蕭々條々たるは吾人感なき能はずである、當夜即時數名の入團者を見ることの出来たのは、爲法國御同慶に堪へないと同時に益々奮

起致すべきである。

横濱教誌

十月四日 夜、神奈川藤原町西村氏方にて集る。磯部先生「壽量の本佛釋尊」

同日 夜、磯子高橋氏方にて集る。小西日喜師並に磯部先生御來講。

同日 夜、中區和田氏方にて集る。磯部先生「信心の水」

同日 午後三時、鶴見生妻貝塚氏方にて、夜は引き續き神奈川榮町石毛氏方にて集る。和賀義見師御來講。

同日 午後三時、神奈川六角橋そば金子氏宅にて集り。和賀師御來講。

同日 夜、磯子藤葉氏方にて集る。磯部先生「信心の得金」

同日 大慈院克彥獲得日壽信士の一週忌が早くも迎つて來たので、磯部御夫婦を始め會員一同並に和賀義見師等折子安の信士の供養塔前に參集、小西師を導師として唱題廻向した。夜は、三ッ澤齋藤氏方にて集る。小西師の御法話あり。

二本松通信

十月一日 夜於蓮華寺題目講修行。

同日 午後二時五十七分當縣通過にて山形聯隊の遺骨二基原隊に歸る因つて見送讀經す。

同日 午前一時二十七分當縣通過にて旭川部隊凱旋す因つて歡送す。

同日 午後二時二十一分當縣通過にて佐藤上等兵の遺骨郷里に歸る因つて見送讀經す。

同日 貧困者救濟事業二本松佛敎不榮會托鉢修行す。

同日 午前五時五十四分當縣通過にて弘前部隊渡滿す因つて歡送す。

同日 夜於蓮華寺題目御法難會修行。御法難に就て 中島 元道師

寄附維持金團費誌料領收

(自十月二十一日至十一月二十日)

一 金拾圓也 東京 井上道太郎殿
一 金貳圓貳拾錢也 岡山縣 橋原 亮治殿
一 金貳圓也 高岡 黒川 安吉殿
一 金貳圓四拾錢也 奈良縣 笠山和喜雄殿
一 金壹圓也 東京 小峯 善春殿
一 金貳圓貳拾錢也 愛知縣 安原 公一殿
一 金參圓也 秋島 末永 博七殿
一 金拾圓也 福島 中村 美津殿
一 金五拾錢也 東京 日下部 二葉殿
一 金壹圓貳拾錢也 大阪 遠藤 實顯殿

一 金壹圓貳拾錢也 神戶 倉藤喜一郎殿
一 金壹圓貳拾錢也 東京 三須久三郎殿
一 金壹圓貳拾錢也 東京 菅沼賢次郎殿
一 金貳圓貳拾錢也 同 藤平 惣助殿
一 金貳圓貳拾錢也 東京 沼部彌太郎殿
一 金貳圓貳拾錢也 同 藤本 マン殿
一 金參圓也 群馬縣 谷本 繁殿
一 金貳圓貳拾錢也 同 村田よし子殿
一 金貳圓貳拾錢也 千葉縣 山中 保榮殿
一 金貳圓也 同 下條 蓮教殿
一 金貳圓也 東京 宇野 博順殿
一 金拾圓也 同 長谷川 米吉殿
一 金拾圓也 東京 井上道太郎殿
一 金拾圓也 同 柴田 武治殿
一 金貳拾五圓也 同 永島 正三殿
一 金貳圓貳拾錢也 同 片岡 次郎殿
一 金貳圓貳拾錢也 同 星野 純義殿
一 金貳圓貳拾錢也 同 久保田 英樹殿
一 金貳圓貳拾錢也 同 廣田 竹吉殿
一 金壹圓貳拾錢也 同 栗城 卯太郎殿
一 金壹圓貳拾錢也 同 中村 新太郎殿

財團法人統一團會計

右難有入帳仕候也

本多日生上人名著在庫品特價提供

- 一 聖語 錄改版 特價 金壹圓八拾錢 送料共
- 一 日蓮主義本領 全 金貳圓拾錢
- 一 法華經要義 賜天 全 金貳圓五拾錢
- 一 日蓮主義心髓 全 金壹圓五拾錢
- 一 日蓮主義精要 全 金貳圓九拾錢
- 一 佛敎の本質と其價值 全 金貳拾五錢
- 一 法華經要品 全 金五拾錢

- 一 本多日生上人 特價 金壹圓七拾錢 送料共
- 一 勤行作法 全 金拾錢

以上施本用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

東京市小石川區音羽町六一ノ七
財團法人統一出版部
振替東京九四〇番

一月「教」誌
定價一冊 金五拾錢
送一年前金 金壹圓貳拾錢
送料共 金壹圓貳拾錢

申込所 東京市小石川區音羽町六一ノ七
「教」誌 發行所 振替東京一〇九四〇番

統一 一冊 全貳拾錢 送料五厘
中々年 全壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 全貳圓貳拾錢

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御特居ノ場合ハ必ず新膏共直ニ御
通知ノ事

昭和八年十一月廿四日印刷納本
昭和八年十二月一日發行
(第四百六十五號)

不許複製
東京市小石川區音羽町六一ノ七
編輯人 磯部 滿事
發行人 磯部 滿事
印刷人 鈴木 日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都印刷所
電話高輪六〇二四番

發行所 東京市小石川區音羽町六一ノ七
財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

清水龍山

守屋貫教
鈴木一成

中谷良英
橋原久遠

共編

內容見本呈上

新修 略註 日蓮聖人遺文集

再版
改訂

科段 別註 御遺文百廿余編(脚註入)

御義口傳

御講聞書

妙行要文集

一日一訓

聖語字解

發行所

体裁 裝幀

卷頭挿入クリムアート寫眞版七葉

四六版 縱六寸二分 横三寸五分

紙數 千百十四頁

特製 總皮 三方金

並製 總クロス 天金

函入最上美本

定價 特製 三圓八十錢

並製 二圓八十錢

送料 廿一錢

東京市日本橋區江戸橋二ノ六(明正ビル)

久

遠

閣

電話日本橋四三二七番
番町四座東京七二八〇六番